

# 阿部 由子

ABE, Yuuko

## きのこについて

About mushrooms



黒い森  
Black forest  
油彩 / キャンバス  
Oil on canvas  
181.8 × 227.3 cm

生き物はくらいところにいると白くなるそうです。このキノコは全てくらいところで大きくなったという想定で描いています。白いシルエットの大量のきのこ、あまり見たことのない風景にしたくてこの作品を描きました。



# 安部 悠介

ABE, Yusuke

## 一生絵を描くために

Painting as my life's work



チャリティ・ゼルダ / Charity Zelda

油彩、トレーディングカード / キャンバス / Oil, trading card on canvas

200 × 200 cm

画面上で扱うあらゆる要素が、自分にとってどのような実体を伴っているのかを考えてきた。自然の中で虫や魚を捕まえて、田んぼの横でカードを眺め、家に帰ればゲームの中でまた草むらをかきわける。私が絵を描く時に体験するぞわぞわとした感覚は、これらと何も変わらなかった。そこで出会う連中と、絵画の中の要素が、実体として同じに思えた。



デュエル・フィッシュ / Duel fish

木炭、トレーディングカード / Charcoal, trading cards on canvas

200 × 250 cm

# 石毛 秀弥

ISHIGE, Syuuya

## 「見る」ことの難しさ

The difficulty of "seeing"

正しく正確に見れている人なんて、もういないのではないのでしょうか。



### Plastic umbrella

プラスチック傘、ビニール、塩化ビニール管、ポスカ  
Plastic umbrellas, vinyl, vinyl chloride duct, Posca pens  
サイズ可変  
Variable size



# 一井 すみれ

ICHII, Sumire

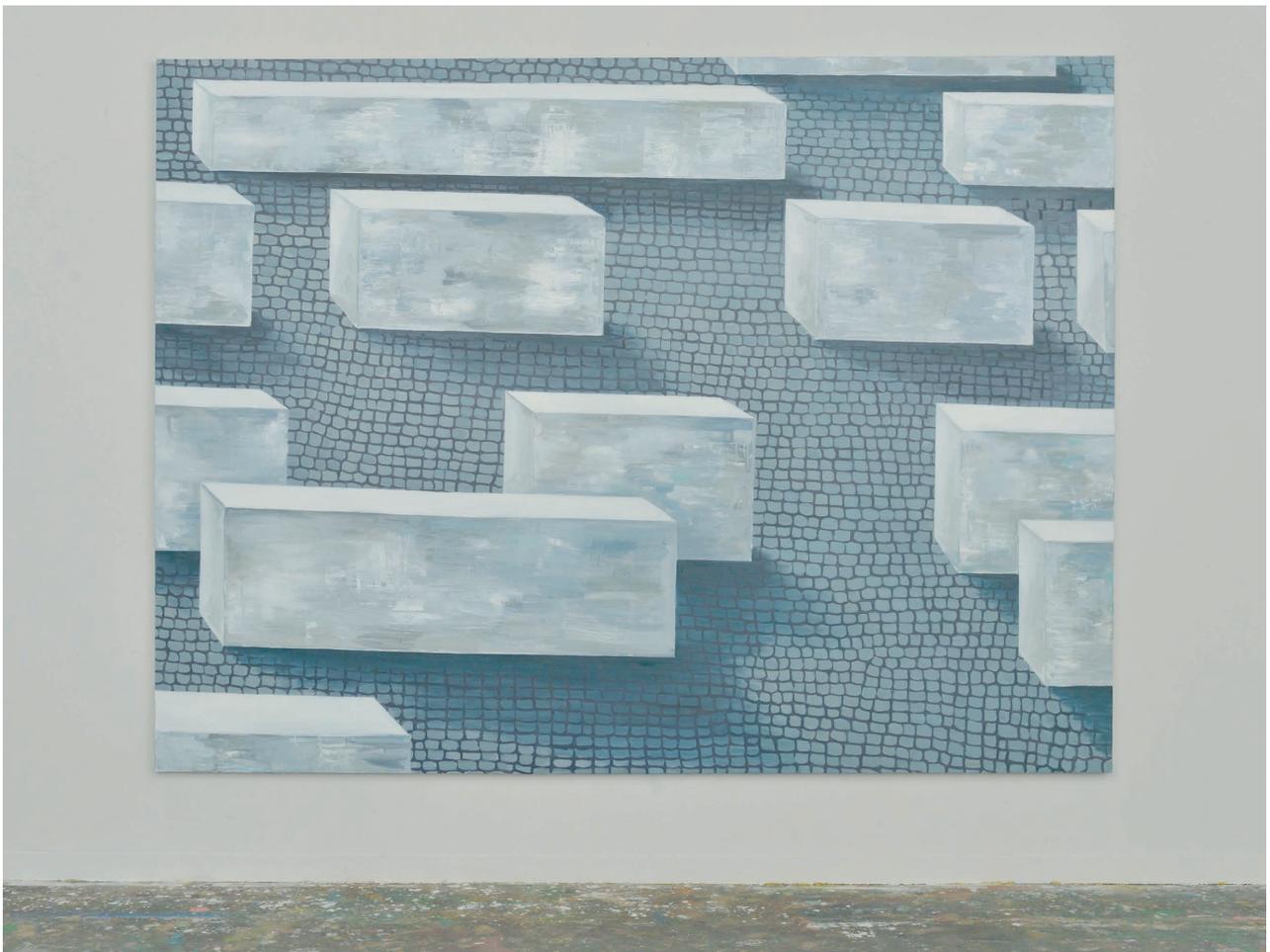
## 再現行為について

The act of reappearance

Repleting a meaning less system と名付けた作品は絵画、映像、テキストのドローイング、メトロノームからなるインスタレーション形式の作品である。

私は現代における生の形(主体感覚の形)の探求を主題に制作するにあたり、現在頻繁に行なわれている再現行為に対して疑問を抱くようになった。

私たちは一度失ったものを、本質的に再び創り出すことはできない。再現行為とはモニュメントを作るだけではないだろうか。「再」という感覚に対しての問い直しを行う。この作品はそのような思考に基づき制作を行った。



Repleting a meaningless system (painting 1)

油彩 / キャンバス

Oil on canvas

194 × 259 cm



Repleting a meaning less system (drawing)  
鉛筆 / コピー用紙 / Lead pencil on xerographic paper / 29.7 × 21 cm

Repleting a meaning less system (video)  
映像 / 9分 16秒 / Video 9' 16"



Repleting a meaning less system (painting 2)  
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 162 × 130 cm

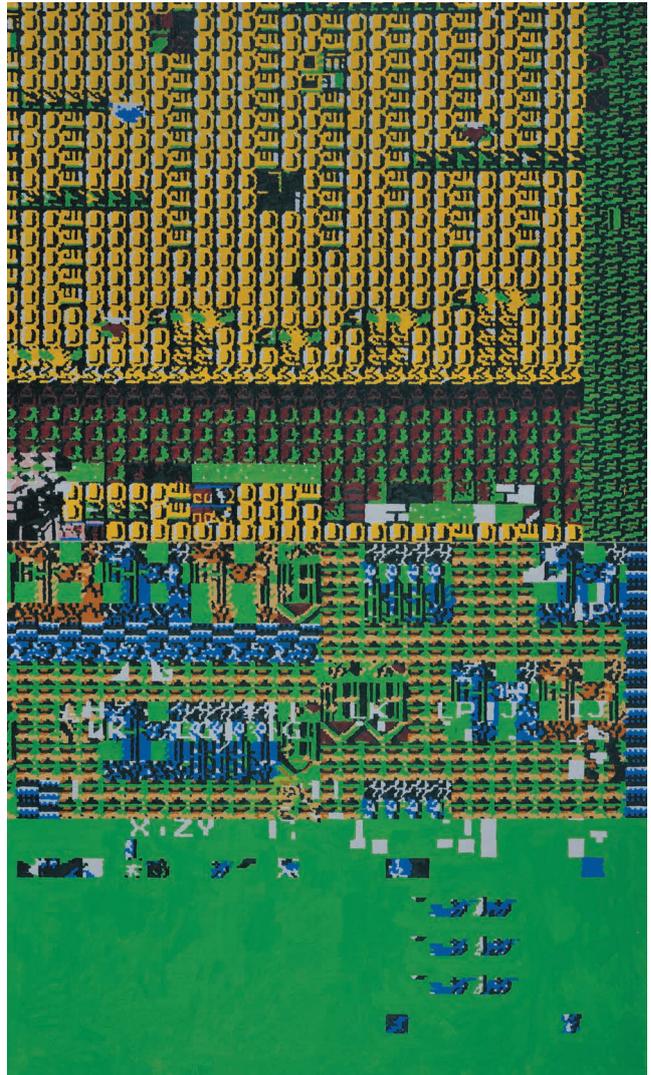
Repleting a meaning less system (painting 3)  
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 233.4 × 91 cm

# 岡田 舜

OKADA, Shun

## バグ映像を用いた絵画制作

Painting using game bug images



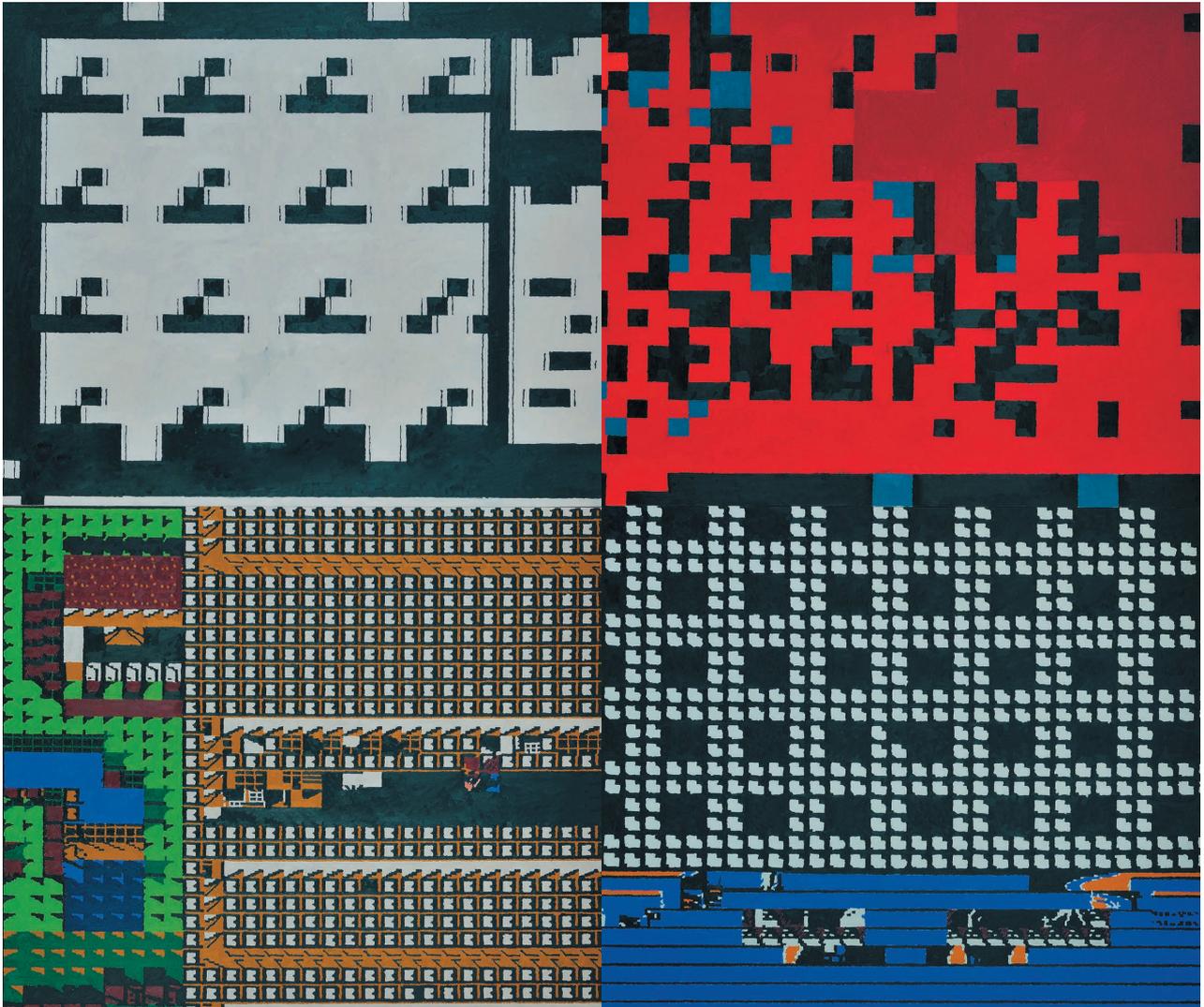
????????????????

油彩、アクリル / キャンバス

Oil, acrylic on canvas

324 × 194 cm

ファミリーコンピュータ（1983、任天堂）のバグ映像をキャンバスにプロジェクションし、絵筆でなぞる方法で6枚の画面を描き、それをランダムに組み合わせ、3つの絵画作品を制作した。



油彩、アクリル/キャンバス  
Oil, acrylic on canvas  
324 × 194 cm

油彩、アクリル/キャンバス  
Oil, acrylic on canvas  
324 × 194 cm

# 長田 鈴香

OSADA, Suzuka

## 人の魅力について

ファミマの店員さん

About human attraction

Family Mart clerk



また会えるかもしれない / Maybe I can see you again

油彩 / アクリル板 / Oil on acrylic panel

104.4 × 104.4 cm

「世界にたくさん人がいる中で、この人と出会えたことはすごいことだ」と言ったりするが、同じ時代に同じ場所で生まれたのに会わないというのもすごいことである。居るのに会わなかったり一生その存在を知らずにいるのは、その人が生きてないことと一緒にあるし、逆に死が何かと聞かれたら、それは「もう会わないこと」だと思う。死は相互性のあるもので、世界からその人が消えるのと同時にその人の世界から自分も消える。

しかし、物理的な死と大きく違うのは、「また会えるかもしれない」ということだ。「また会えるかも」というのはすごく大事なことで、このおかげで生きることをなおざりにせずいられる。人生の明るい希望である。

誰かに会えて嬉しいと思ったり、この人がいるから生きていけるという喜びを含めて、今まで会った人やこれから会う人のことを追想する。



また会える / I can see you again  
油彩 / アクリル板 / Oil on acrylic panel  
104.4 × 104.4 cm

# 何天一

HE, Tianyi

## 絵画における存在感についての研究

A study of the sense of existence in painting



天地玄黄・天 / Universe

絹、墨、アクリル、中国画顔料、土 / パネル

Silk, ink, acrylic paint, Chinese paint, soil on board

182 × 455 cm



天地玄黄・地 / Creation

絹、墨、油絵具、中国画顔料、土 / パネル

Silk, ink, acrylic paint, Chinese paint, soil on board

182 × 455 cm

石は自然に最も普通なものでありながら、人々の生活によく見えるものです。この目立たないものに対して人々はいつもその存在に気をとめません。ですが、自分にとって、石は特別な存在です。修士の二年間ずっと石を描くことを通して、絵画に存在の感覚を表そうと試みてきました。その理由は、石の特性が存在を表す一番いい媒介だと思ったからです。ですが、研究の進みに伴って石に深い意味が含まれてきました。それは、中国と日本の文脈に石を巡って、各自

の美意識があります。中国の春秋時代に初めて石の趣味について記載があります。そして、宋時代に石の美意識の専門書が初めて書かれました。同じ時期、日本の水石文化も中国から伝わりましたが、両国は文化の差異によって石に対する審美が違います。故に石は両国の文化の繋がりとして一つの重要なものだと思います。文化のシンボルとして石の美意識は東洋という繋がりがあります。



# 川邊 真生

KAWABE, Manabu

## 不安定な人体

An unstable human body



不安定な人体  
An unstable human body  
油彩 / 垂木、キャンバス  
Oil on canvas and frame  
300 × 200 cm  
260 × 188 cm  
サイズ可変 / Variable size

介護施設内には均質でない空間が広がっている。異なる身体、異なる立場、そして異なる生活。先日新しいお客様が入居された。出勤するたびに何度も職員と他の入居者に自己紹介する姿が目立った。そしてある日、「私はここに入居することに納得していない。」と私に訴えてきた。それが本当のことなのかは私には判らないが、つまりこの方は、ご家族の都合により半ば騙される形で入居したと訴えてきたのだ。勤務を始めてからこういった入居者には度々会った。ご家族が様々な理由で共に生活することが困難となり、施設利

用を考えるとといったケースが多いようだ。入居者本人だけでなく、そのご家族の都合というもこの世界の裏には存在しているのだ。

様々な都合に触れると、その度に自分の状態が変化していく。その流動的で不安定な状態を自分の中に認めることは、多様な価値観に自分を開くことに繋がる。人体は、確かなものがなく不安定であると同時に、新たなものを知ることと変化していくことができる存在なのである。



# 久保 真理子

KUBO, Mariko

## 寓意と抽象

Allegory and abstraction



Night is burned

油彩、キャンバス / Oil on canvas / 256 × 558 cm

私は、作家として、私的風景をどう寓意的に表すか、そしてその風景をどこまで抽象化できるかという研究テーマに長らく取り組んできた。また、そこに付随する課題とは、私的風景の寓意的表現によってわたしは他者に対して何を見せようとしているのかという大人としての課題だった。卒業の節目にこの二つの課題に真摯に向き合うため、私の中で最も印象的な光景のひとつを、私の制作でのキーカラーだった黒で描き、ひとつの答えとなる絵画に取り組んだ。



# 近藤 拓丸

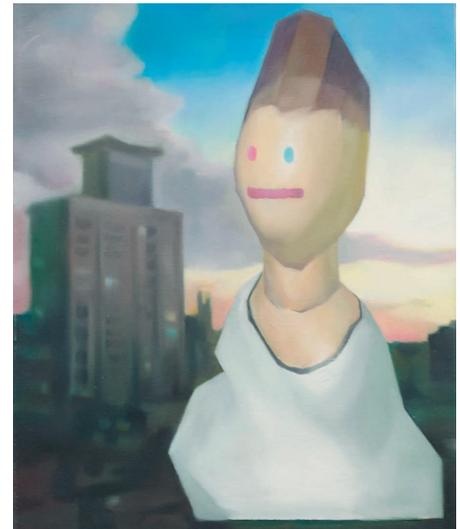
KONDO, Takumaru

## 複数の旅

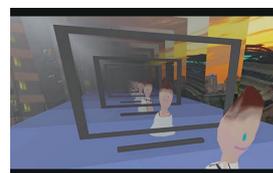
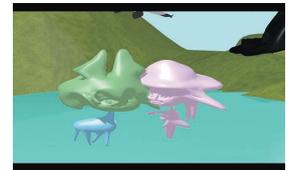
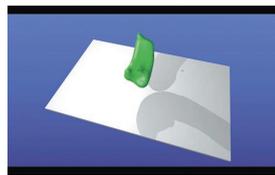
Multiple journeys



私は私と同じあなた / I am the I that is the same as you  
パイプ、ビニール、木、絵 / Pipe, vinyl, wood, paintings  
映像 / 8分1秒 / Video 8' 01"  
300 × 400 × 500 cm



私は私と同じあなた / I am the I that is the same as you で使用した絵画



私は私と同じあなた / I am the I that is the same as you で使用した映像

旅を始める時の出発地点は、普段住み慣れた自分だけにわかる世界だ。旅の面白いところは、自分だけにわかる世界から外の世界へと積極的に足を踏み入れ、「わからないもの」と出会うことだ。

自分がわからないものとの出会いを経験し、それを思い

返すことで「わかる世界」と「わからない世界」を行き来することができる。その行き来を繰り返すことで「わかる」と思っていた日常的なものに対する認識が変わっていき、自分自身も少しづつ変化していく。

# 齋藤 友里

SAITO, Yuri

## 社会は私へと繋がる

Society leading to me



10から1になる〜ダブルコンソメ〜  
10 become 1—Double consomme  
ビデオ / 22分 15秒 / Video 22'15"

「社会」は「私」であって、「私」は「社会」である。  
でも、決してそうではなくて二人が一つに重なるのだけれども、決して完全には重ならない。

彼と私は違うけれどもでもはっきり“そうです”とも言えない。



1の分裂行進  
The march of 1  
油彩 / キャンバス  
Oil on canvas  
194 × 162 cm

## 澤永 薫

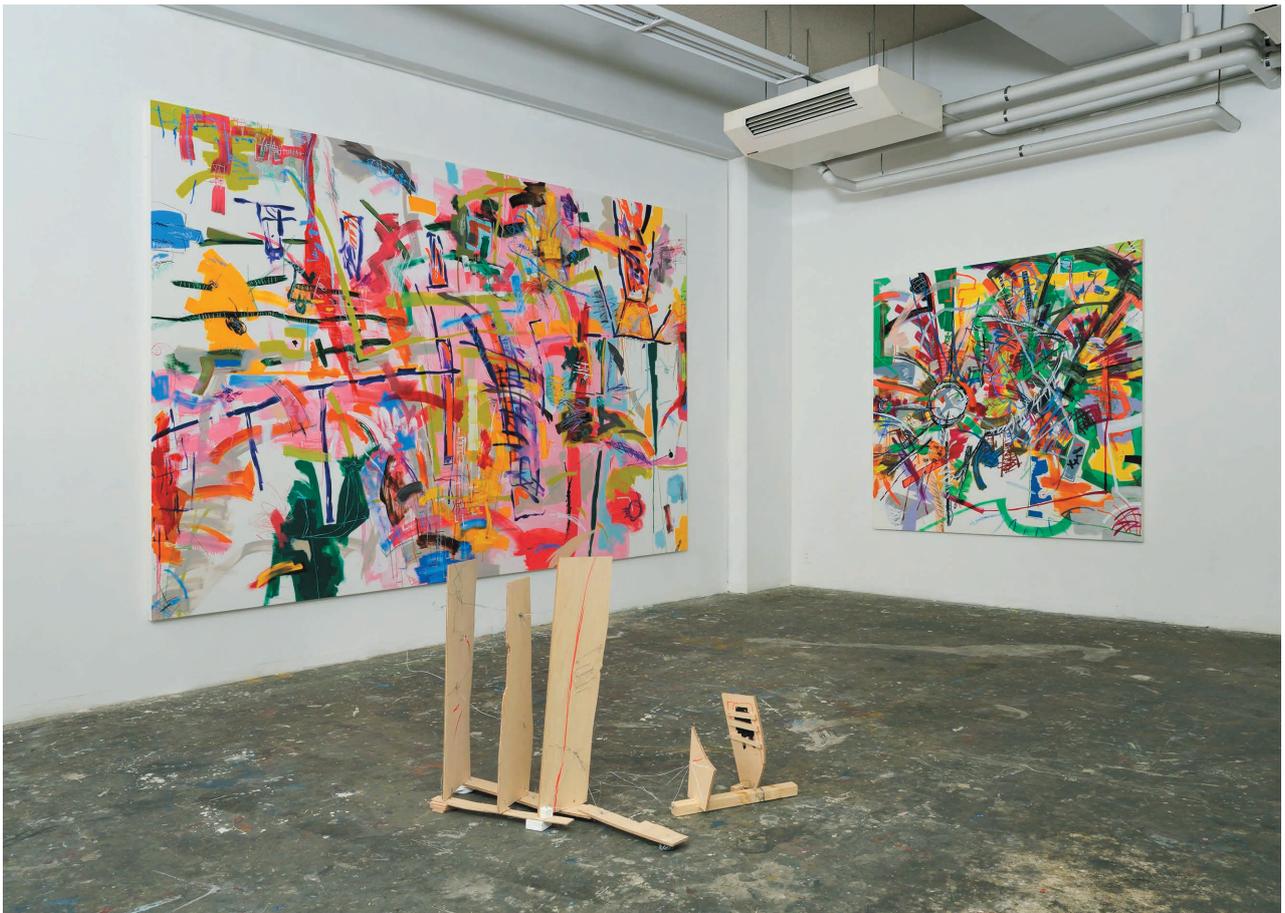
SAWANAGA, Kaoru

### 時間の震え

Wavering in time

知人の制作現場に訪問した。休憩中、外では雨が降っていた。机にある目の前のガラスのティーポットに湯が注がれ、紅茶の茶葉は湯に舞っていった。

雨と茶葉の光景を同時に視覚的に体感する心地良さを知人に話すと、会話をしてゆく中で、「循環するスピード」という言葉が生まれた。この出来事から、時間まつわる言葉に注意を払うようにした。



Living room / capricious-3  
油彩、オイルパステル / キャンバス / Oil, oil pastel on canvas  
259 × 388 cm

Living room / capricious-1  
油彩、オイルパステル / キャンバス / Oil, oil pastel on canvas  
194 × 194 cm

そんな折に、大学の図書館でロラン・バルトの「時間の震え」<sup>1</sup>という言葉に出会った。

私にとって、「時間の震え」とは、異なる速さのものを同時に視覚的に体感することなのかもしれない。

1. ロラン・バルト / 沢崎浩平：訳『美術論集』みすず書房 93頁 1986年



Living room / capricious-2  
油彩、オイルパステル / キャンバス / Oil, oil pastel on canvas  
235 × 194 cm

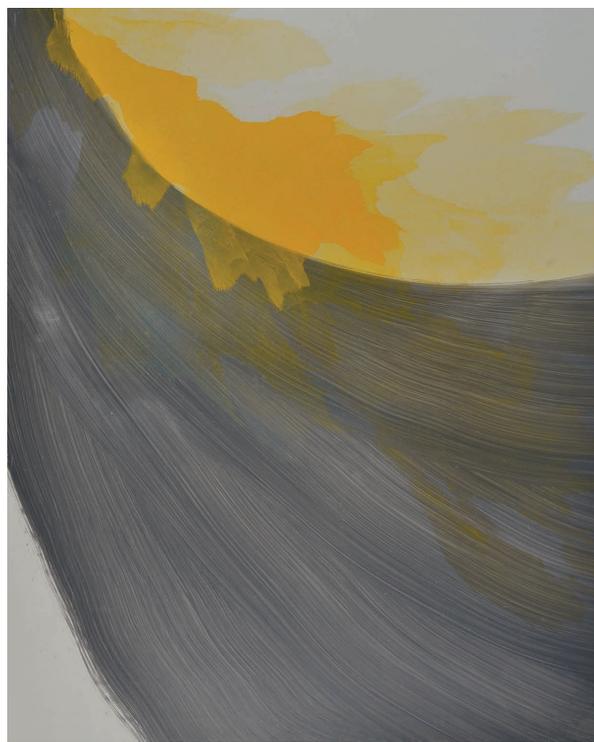
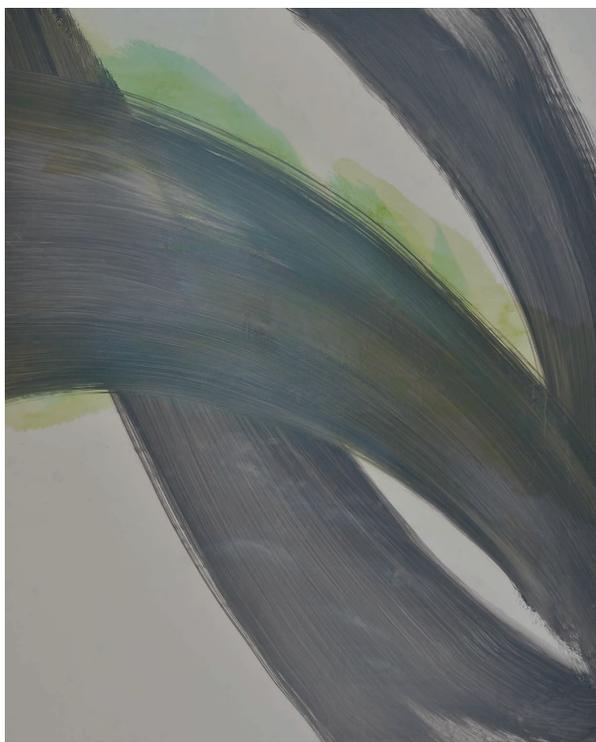
Living room / capricious-4  
木材、針金、空き缶、オイルパステル、アクリル絵具、ボールペン、ペンキ、鉛筆、釘、振子 / Wood, wire, empty can, oil pastel, acrylic, ballpoint pen, paint, pencil, nails, screws  
87 × 49 × 130 cm

# 柴田 大全

SHIBATA, Daizen

## 体感

Bodily sensation



体感 I・II・III・IV

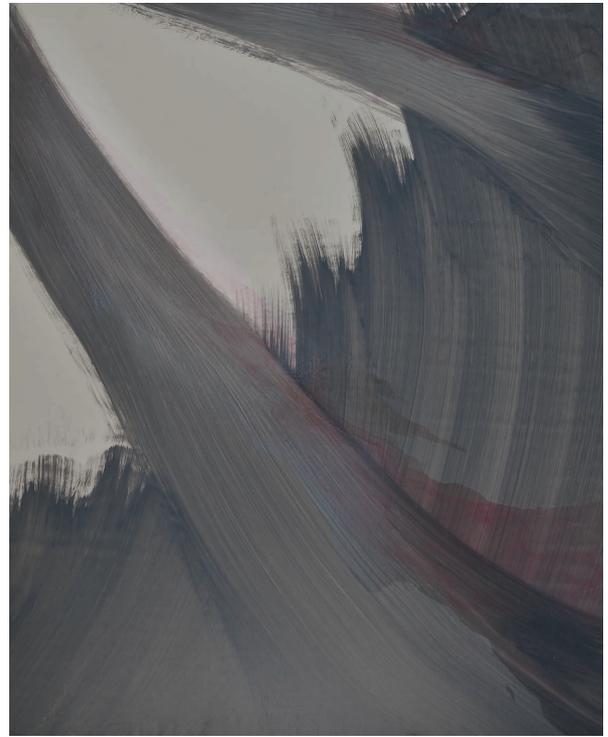
Bodily sensation I・II・III・IV

油彩 / キャンバス

Oil on canvas

227.3 × 181.8 cm

私は以前、自転車レースで国体とインターカレッジ、インターハイに出場し、2種目で5位と8位に入賞した。関東のロードレースでは優勝した。現在、アスリートとして体感から独自の作品を生むことに情熱を持って励んでいる。



# 高見 詩穂

TAKAMI, Shiho

## 現実と虚構

Fiction and reality



Demarcation

アクリル / キャンバス / Acrylic on canvas / 227 × 454 cm

我々が住んでいる世界には、童話や学校という枠組みの中、美化された思い出、憧れや逃避、子供の世界、遊園地などさまざまな虚構と呼ばれる世界が存在している。観念は壊さなければ次に進めず、また壊さなければ殻に閉じこもったまま。

境界は様々なことを意味する。国の境界、家族の枠組み、人間の心。さまざまところにあるそれは入口と出口のようにそこにあるが、ある種の幻想さをはらんでいる。

目に見えるようにすることでその幻想性を問う。あなたにはどんな門が見えているのだろうか。



# 田中 知世

TANAKA, Chise

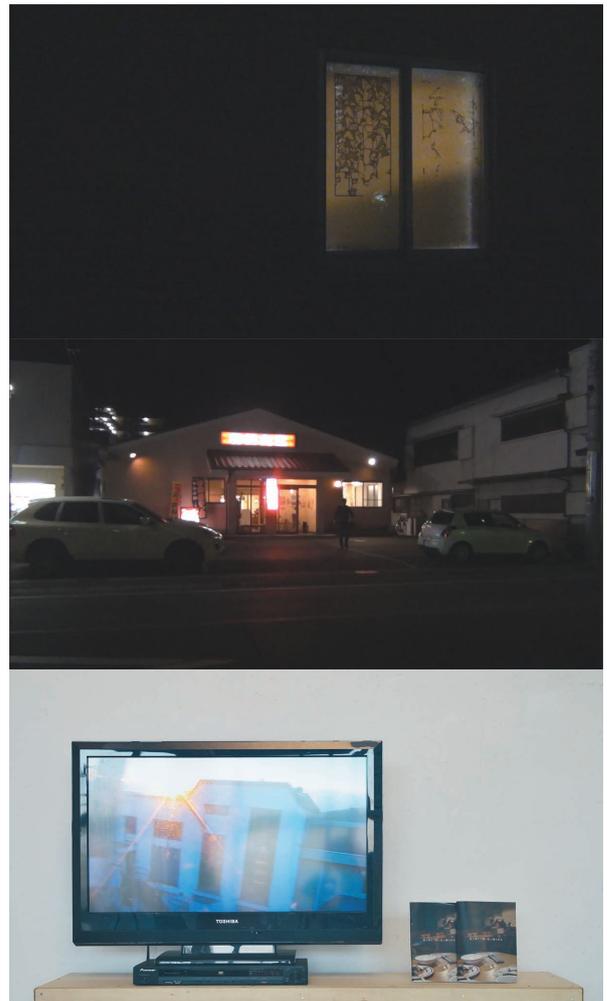
## 後ろ向きで前へ引っ張られる

I'm pulled to my future backwards



父は体臭の強い人だった。二階は父の居室で、階段を上りながら臭う父の香りがまるで境界のようで、なかなか二階に上がることができなかった。小学生の私は、しかしながら日曜日という時間を持て余し、とぼとぼ二階に上がり父の背中を見ていた。部屋の中はムワッとした暑さで、父の臭いと

缶ビールの残り香やタバコの灰が混じり合い、ムツとした雰囲気をつけていた。西日が部屋の中を照らし、父の背中を際立たせていた。父は競馬を見ていた。何か話かけたいような気持ちに襲われながらも、喉まで出た言葉は何かにせき止められて、発することはできなかった。



後ろ向きで前へ引っ張られる  
I'm pulled to my future backwards  
テキスト / ビデオ / 6分  
Text, video / 6 minutes

# TANGCHAROEN, Ekkaphan

## 科学の発達にはコントロール出来ない怖さがある

The horrors that can't be controlled in scientific progress



管理されるわたし no.10

Bondage no.10

パステル / キャンバス

Drawing on canvas

200 × 280 cm

科学の発達にはコントロール出来ない怖さがあるというテーマで作品を作りました。現代では新しいことを発見する、あるいはまだだれにも知らないことを実験で検証することは当たり前だと思いますが、人体実験はしてはいけないことになっています。実際クローン人間を作るのはものすごく怖いと思います。自分のことを管理されることや自分のクローンが自分に殺されることになるとしたら、その色々な問題をコントロールできるのだろうか。



管理されるわたし no.11

Bondage no.11

鉛筆 / 紙

Drawing on paper

110 × 110 cm

# 戴玉琳

DAI, Yulin

## 時間と生命

Time and life



魂の沈殿 / The precipitation of the soul  
テンペラ / パネル / Tempera on board / 145.5 × 224 cm



彼岸 / The other side  
テンペラ / パネル / Tempera on board / 38 × 318.5 cm

時の流れに従って、身の回りのものはずっと変化している。私にとって、私が世界のなかにいることを知るといったことはどのような意味を持つのか。世界中のすべてのものに対して、もし生があれば、滅ぶこともある。これは生命のリズムだと思う。この短い人生で、自分の意識を拘泥せずに、自由に何気ない心で絵を描く。その生活に対する生命の穏やかな美を表現したい。



魂の沈殿 / The precipitation of the soul  
テンペラ / パネル / Tempera on board / 145.5 × 224 cm



# 堤 絢子

TSUTSUMI, Ayako

## なぜ人は絵を描くのか？

What motivates us to draw?



ウロボロス / Ouroboros

油彩 / 木製パネル / Oil on wooden panel

160.2 × 390 cm

なぜ人は絵を描くのか?なぜ私は絵を描くのか?商売や名声のためではないもっと根本的な理由について、精神的観点と私自身の経験から探った。



# 藤山 恵太

FUJIYAMA, Keita

## 記憶と画像

Record & Image



われらの時代 / In our time

油彩、水彩 / キャンバス、紙 / Oil on canvas, watercolor on paper / 227.3 × 181.8 cm

昨日はこれを読んで、今日はあれを観て……  
そうやって蓄積されていく自己を、少しややこしくして、わから  
なくして、ごまかした。  
そうやって捻出されたものを、絵画に落とし込んだ。



# 前田 佳寿美

MAEDA, Kazumi

## 私の中のモンスター

Monster inside me



怖がらなければ何がみえる? / What would you see if you weren't afraid to face yourself?

墨、アクリルガッシュ、マーカー、綿布 / パネル / Sumi, gouache and marker on cotton mounted on board

242 × 182 cm

怒り、殺意、哀しみ…様々な感情が混ざり合ったどす黒い“何か”が自分を侵食し、暴力的になる。論文を通しソレを「モンスター」と呼ぶ様になった。

『消したい、殺したい』。他人や環境、社会。何より自分自身に対して叫ぶネガティブな声をどうしたら止める事が出来るのか。制作を通して自身を救済するヒントを、私の過去の作品を他の作家や作品と比べる事で探した。

その中でこのモンスターは決して敵ではない、という事が分かってきた。その正体は、防衛本能を働かせすぎた、小さく弱虫な「私」自身だったのだ。

「これは私じゃない」と否定してきた醜いモンスターを、自分の一部だと認める事は辛くもあった。だが今まで自分が目を背けていたモノと正面から向き合う事で見えてきた姿も沢山あった。院での作品はその備忘録である。



いつもそばにいる / It is always with me

墨、アクリルガッシュ、マーカー / 綿布、パネル / Sumi, gouache and marker on cotton mounted on board  
327 x 194 cm

# 牟紫玥

MU, Ziyue

## 芸術の世界で「自由なファッション」を探す

An attempt to find a "free sense of fashion" in the world of art



ネオンサインの世界 / World of neon signs

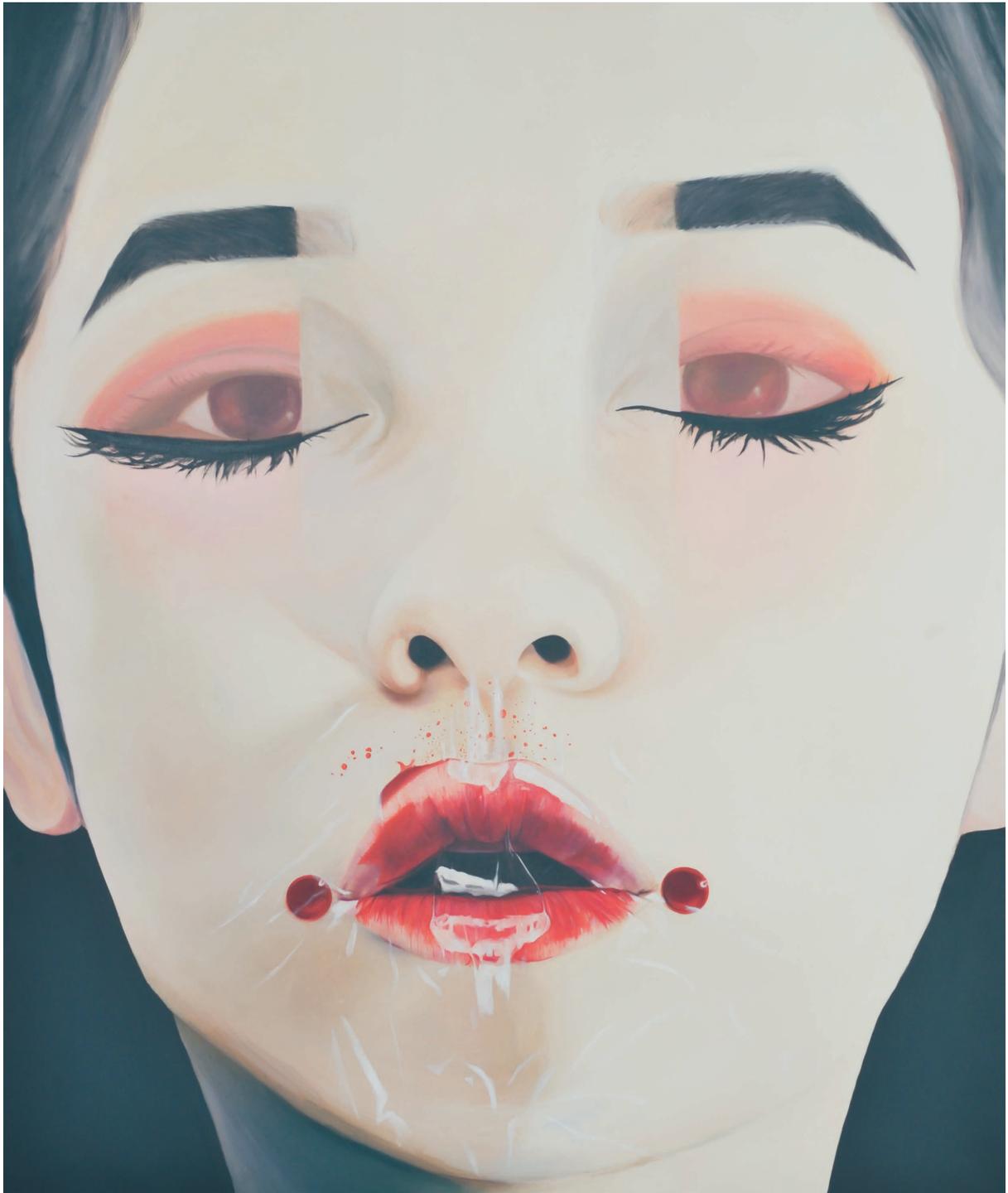
油彩 / キャンバス / Oil on canvas

53 × 65.2 cm

私は中国の大学の学部では「ファッションデザイン」を専攻していた。しかし、「商業」的要素が存在し、個人の審美や個性などをたくましくすることを非常に制限していることを感じた。私の理想とする「自由なファッション」とは異なったものだった。私の理想とする「自由なファッション」は自分の個性、見解を持って、他人の尻馬に乗らない、自分と

してのファッションである。

私の作品のほとんどは、女性と女性の体の一部をモチーフとして使い、女性が束縛されていることを表現している。私は「自分を守る、世俗に束縛されないで、自分の個性を表す、自分のために生きるのが一番のことだ」と他の人に教えたいのだ。



顔 / face  
油彩 / キャンバス / Oil on canvas  
194 × 162cm

# 山田 智子

YAMADA, Tomoko

## 絵画は身体の矛盾をつなぐ

Painting connects my physical contradictions



目と手の狭間(2)

Between the eyes and the hand (2)

油彩 / キャンバス、紙粘土、段ボール  
Oil on canvas, paper clay and cardboard

18 × 14 cm

見えないまま描けないままに

I want to see but cannot see it

I want to draw but cannot draw it

油彩 / キャンバス / Oil on canvas

33.3 × 24.2 cm

見えないまま描けないままに

I want to see but cannot see it

I want to draw but cannot draw it

油彩 / キャンバス / Oil on canvas

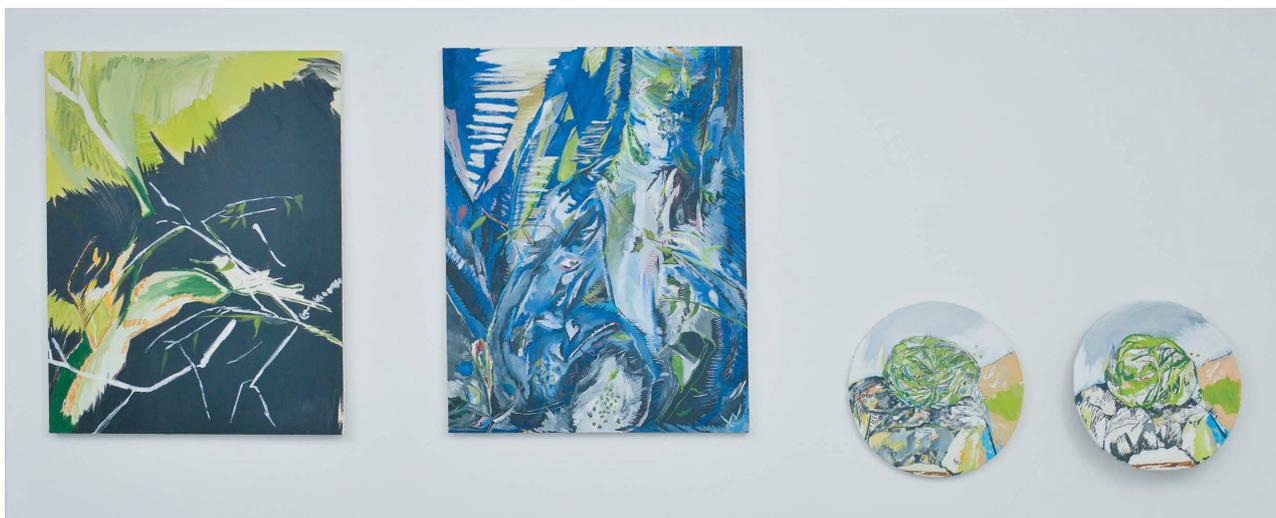
162 × 130 cm

絵を描く行為は不確かなものだ。その不確かさは矛盾である。目で見えているのに目で見ることは難しい、手で描けるのに手で描くことはできない。しかし、結果として見ることはできるし、描くことはできる。矛盾にまみれた絵を描くという行為。わたしが絵を描く行為に思うようにままたらない感情を持ち始めた原因とは、矛盾である。そして、それ

は目と手の矛盾、見ること・描くことの矛盾である。“見えな  
いのに見える、描けないのに描ける”を引き起こす目と手と  
は何ものなのか。目と手、見ること・描くことによって為さ  
れる「絵を描く行為」とは何ものなのか。わたしはこれから  
も制作を通して考えていく。



見えないまま描けないままに  
I want to see but cannot see it  
I want to draw but cannot draw it  
油彩 / キャンバス / Oil on canvas  
116.7 × 91 cm



見えないまま描けないままに  
I want to see but cannot see it  
I want to draw but cannot draw it  
油彩 / キャンバス / Oil on canvas  
116.7 × 91 cm

見えないまま描けないままに  
I want to see but cannot see it  
I want to draw but cannot draw it  
油彩 / キャンバス / Oil on canvas  
116.7 × 91 cm

目と手の狭間 (1)  
Between the eyes and the hand (1)  
油彩 / キャンバス、紙粘土、段ボール  
Oil on canvas, paper clay and cardboard  
53 × 53 cm

## 渡壁 遥

WATAKABE, Haruka

### 空間に崇高という感情を投影すること

You can feel the sublime in every space

表現するということの葛藤、見ること、そして思考や記憶、あるいは日々の生活、その流れの中にある衝突のようなものを表現することが私の姿勢である。個人的な体験と結びつけながら、その思考や感情、想像を、敢えてシンプルな要素で構成することで、作品を作るという行為と物質感を強調しつつモチーフの普遍性を意図して制作している。

記憶の反芻のなかで、あるものは取り除かれ、あるものは強調され次第に調整され変容されていく、その過程とはつまり喪失と抽出であり、葉脈とりのようなものである。些細な衝突でもそこからはっとして、発見できることがある。その衝突を投影する空間を表現した。そういった思考の流れに抽出というレイヤーを通し具現化することが今後につながる研究である。



間 / Ma  
アクリル / キャンバス / Acrylic on canvas  
30 × 20 cm



無題 / Untitled  
アクリル / 紙 / Acrylic on paper  
45 × 23 cm



内なる美 / The aesthetics inside things

アクリル、油彩 / キャンバス / Acrylic, oil on canvas

230 × 185 cm